

令和4年度第5回神奈川県ボランティア活動推進基金審査会（概要）

日時 令和5年1月25日（水）14:00～17:30

場所 かながわ県民センター11階 コミカレ講義室1

■ 開会

（かながわ県民活動サポートセンター副所長から本日の予定を説明）

- 水澤委員が欠席、委員7名での開催。
- 会議の流れを説明
- 14時00分～15時00分 事前確認
- 15時10分～16時00分 令和5年度ボランティア活動補助金（継続）のプレゼン審査
- 16時10分～17時30分 プレゼン審査に対する選考
- 17時30分 閉会

（審査会長より開会の宣言）

- 令和4年度第5回神奈川県ボランティア活動推進基金審査会を開会する。
- 率直な意見交換を通じて公平な審査をする必要があり、神奈川県情報公開条例第25条第1項第1号に該当することから非公開とする。
ただし、プレゼンテーション審査は公開とする。

■ 審議事項 令和5年度ボランティア活動補助金（継続）事業の選考

（事務局から以下について説明）

- ボランティア活動補助金事業の応募状況（資料1）
- 来年度のボランティア活動補助金事業に係る予算（資料2）
- 審査委員と利害関係のある団体からの提案なし
- 事務局からプレゼン審査対象団体の提案概要及び幹事会での事前調査結果について報告（資料3、参考資料1）

（委員による審議）

- ボランティア活動補助金（継続）事業への提案事業に係る公開プレゼンテーション審査における確認事項等について検討した。

（プレゼンテーション審査の実施）

- 協働事業負担金の提案事業に対するプレゼンテーション審査を次のとおり行った。なお、傍聴は会場での参加とした。

【在日ミャンマー人のための定住支援事業と人材育成】

特定非営利活動法人リンクトゥミャンマー（以下、「リンクトゥミャンマー」という。）によるプレゼンテーション（公開ヒアリング）を実施。

<質疑>

(峯尾委員)

プレゼン資料にあるとおり、日本に住むミャンマーの方は、あまり多くはないとのこと。ミャンマーの方の日本におけるコミュニティの特徴があれば教えてほしい。

また、そのコミュニティは、他国が形成するコミュニティと違いがあるか、ある場合は、どのような違いがあるか教えてほしい。

(リンクトゥミャンマー)

一言でいうと、民族ごとにコミュニティを形成している。特にクリスチャンの方は、教会を中心にコミュニティがあり、仏教徒の方は、自分たちでお坊さんを招いてお寺を作る活動を熱心に行っている。仏教徒の中でもそれぞれ言語が異なるため、言語ごとに集まっている。イスラム教徒の方もイスラム教徒で集まっている。

他の国との違いは、よく分からないが、最近であると SNS を通じて友達になった等、新たに SNS コミュニティが生まれてきている。ベトナムの方は、そのようなコミュニティが結構あると思う。

(峯尾委員)

定住支援の事業は、支援数も増えてきており、苦勞をされながらも実施しているのだと思う。もう一つの人材育成の事業について、貴団体は、多くのミャンマーの方というよりかは、一人ひとりに対し丁寧に支援をされていると思う。そのような支援を受けてきた人が支援者になるような人材育成、仲間を育てるといふ事例はあるのか。

(リンクトゥミャンマー)

それはよくある話である。例えば、私たちが A さんに日本の情報を伝え、A さんから他の B さん、C さんにその情報を伝える。そうすることで A さんが間接的な支援者になる。

(峯尾委員)

貴団体の協力者になって、人材として活動していくという事例はあるか。

(リンクトゥミャンマー)

そのような概念を在日外国人にあてはめることは非常に難しいと思う。

(峯尾委員)

日本には、様々な国の人たちが来ており、その方たちへの支援団体も存在する。そういった他の支援団体の知見やノウハウを活用していくという方向性はあるのか。

(リンクトゥミャンマー)

積極的に学んでいきたいと思っている。金沢区にある金沢国際交流ラウンジとは、定期的に交流やミーティングを実施している。その中でフィリピンの方はこういうことに困っている、中国の方はこういったことに困っていて、この辺りに住んでいる等の情報交換を通じ、ミャンマーの方だけ

のトレンドではなく、共通していること、逆にミャンマーの方に特徴的なこと等、比較している。この交流は、これからも継続していきたいと考えている。

(峯尾委員)

そのような交流を通じ、貴団体独自のスタイル、方向性等、思い描いていることはあるか。

(リンクトゥミャンマー)

自立に結びつけたいということが一番である。

例えば、区役所の支援は、ハローワークを紹介する、生活保護課を紹介することで終わってしまうことが多いのだが、私たちは、一度、紹介して終わるのではなく、その後も継続的なモニタリングをする。その方がどのように自立していくかをずっと見ている。

(中島会長)

先ほど当事者の方を組織の人材として活用することは難しいという話があった。この補助金の大きな割合を資金調達も含めた人件費に使っているが、組織として、これから人材を確保していく見通しと、資金調達についての考えを教えてほしい。

(リンクトゥミャンマー)

基金 21 でインターンシッププログラムを始めてから、年に3人程度であったところが10人以上に増え、ファンドレイジングについてもインターンのおかげで年間に100万円くらいに増えた。

確かに中長期的に働く方が必要だと感じており、現在、基金 21 事業の経理を担当している者が長期的に働きたいと言ってくれているので、簿記研修を受けてもらっている。インターンの方も徐々に長くやりたいという方も増えてきているので、そういった方々に長くやってもらい、次の世代に引き継いでいってほしい。

現在の規模くらいの常時3～4人のインターンを継続できれば、定住支援事業はしっかりと継続できると考えている。

(中島会長)

インターンの募集について、募集のルートが継続的に機能するように構築されているのか。

(リンクトゥミャンマー)

これもインターンがアイデアを出し、採用しているのだが、ボランティアサイトから積極的に応募がくるルートと、明治学院大学から直接インターン受入れの依頼があり、徐々に採用のコネクションや方法が確立されてきている。

(中島会長)

人材や資金を含め、事業継続のための組織基盤のために、3年目に取組みたいことがあれば教えてほしい。

(リンクトゥミャンマー)

今の20代の方は、SDGsに非常に敏感であり、困難な方を助けたいという気持ちが非常に強いので、そういう方がいかに社会で役立てるか、自分を使えるかということを知りたいと思っている。

(中島会長)

多文化共生の事業について、支援者を得ることにもつながると思うが、可能性や所感があれば教えてほしい。

(リンクトゥミャンマー)

基金21で実施している定住支援と人材育成は、多文化共生に非常に寄与すると思う。

私たちの周りでは、簡単に生活保護を受給したいという方はほとんど出ない。東京では、非常に高い率で出ている。これは、一度、生活保護にするとビザの年数が短くなる等、様々なことを伝えているからである。移民の方の受け入れへの反発は、社会保障費が上がるという心配が日本人にあるということが大きな理由だと思う。そういうことを一つ一つ解決していく。その現場を若い方たちに見せ、多文化共生をどうしたらよいかをみんなで考えていければと思っている。

【離婚に伴う子どものための紛争解決モデル構築事業】

一般社団法人びじっと・離婚と子ども問題支援センター(以下、「びじっと」という。)によるプレゼンテーション(公開ヒアリング)を実施。

<質疑>

(為崎委員)

着実に成果を上げていることが分かったが、ADRの成果を審査会として判断することが難しい。令和3年、4年の申立件数や応諾件数、成立件数について、ご自身たちではどのように評価をしているか。満足のいく件数であるのか、まだ足りないと感じているのか等を教えてほしい。

(びじっと)

件数は少なく見えるかもしれないが、着実に増えており、1件ずつ丁寧に対応していくことで改善につながっており、着実に進んでいると考えている。

(為崎委員)

対応する貴団体の体制面等も踏まえ、申し立て件数でいうと、何件程度まで受け入れが可能か。受け入れられる件数の上限はあるのか。

(びじっと)

申し立て件数は、年度ごとに計画を立てているが、上限は設けていない。

まずは、会員内のサービスを実施し、面会交流支援の現場とADRの紛争解決がどのように連携できるのかを検討することが重要。これは、法律も関係するため、ここをしっかりと構築する。人材育成プログラムは既に作れており、支援スタッフとしてボランティアで携わりたいという弁護士の方も数多くいるので、上限を設けずに進めていきたいと考えている。

(為崎委員)

プレゼンの中で、他団体でADRを持っていないところでも、貴団体のADRの仕組みを使えば紛争解決支援ができるという話があった。神奈川モデルを波及させていく際、ADRが持てるように各地の団体を支援するのではなく、貴団体のADRを活用することも含め、面会交流支援団体がトータルで紛争解決の仕組みを持てるというイメージか。

(びじっと)

ADRの仕組みを自団体で持つには、組織がしっかり作られており、セキュリティが万全な事務所がある等の様々な要件があるため、そのような要件を満たし認証可能な団体には、認証の支援をしたいと考えている。

それ以外の小さな団体、例えば、リモートのみで活動している団体、弁護士の方で本業とは別にボランティア的に支援したいという団体は、要件を満たすほどの組織ができあがっていないため、認証自体が難しい。そういう団体に、当団体を使ってもらいたいと考えている。

(為崎委員)

人材の育成も重要になると思う。調停の部分に関わる専門性を有する人材や、ADRに結びつけるための相談員の育成について、今後、どれくらいの人数を目標に、どのように強化していく予定か教えてほしい。

(びじっと)

人材育成プログラムの中で、調停員の育成プログラムと相談員の養成プログラムを作り上げた。課題図書を読み、Google フォームでの試験を受け、オンライン研修を経て現場に入るという流れである。それぞれ学ぶことは違うが、調停員研修も相談委員研修も同じような流れで進めていける。

調停員については、弁護士調停員と支援スタッフの調停員が2人1組で入っているようにしている。法律的部分は、弁護士の調停員に任せるようにしている。

相談員は、法律的なことも学ぶが、どちらかというと心理学を学んでいただいて、当事者が葛藤を抱かないようにしていきたいと思っている。

今回、新たにADRの申立があったら、期日の前に相談を取り入れることを試行的に取り入れている。

(為崎委員)

プレゼンの中で補助金終了後は、本事業での収入や他事業での収入、他の補助金活用や、協働事業負担金も視野に入れるとあった。現在、これらはどれくらいの見通しが立っているのか。

(びじっと)

具体的な見通しは立っていない。今回の基金 21 が初めての補助金であったため、手探りの状態である。他の補助金や助成金の申請はしているが、それが受けられるかどうかはまだ分かっていない。そのため、具体的な金額の計画は立てられていない。

協働事業負担金については、県の協働先にしたい部署にアポイントをとって説明をしたり、基金事業課へ事前相談をしているところである。

(田中委員)

離婚を決めてからこのサービスを知る人が多いと思うが、事前に知っていれば適切な離婚に踏み切ることができる場合もあると思う。関係者だけではなく一般の方への認知度を上げていくためにどのような発信や取組を行っているか教えてほしい。

子育て支援拠点との強化を目指していると思うが、現状は、年1回の勉強会となっており、少しトーンダウンしているようにも見受けられるが、今後の展開や連携強化について、どのようなことを考えているか教えてほしい。

(びじっと)

子育て支援拠点については、昨年 of 年末に、パンフレットを全拠点に置いてもらえるようになった。そこで一般の周知につなげたいという思いがある。

ADRの利用については、まずは会員の利用者を募り、支援現場で問題があったらADRにつながるように、会員のための周知を徹底している。

また、面会交流支援全国協会という認証団体が発足して活動を始めているので、そこを通じても発信をしていく予定である。

(田中委員)

面会交流支援全国協会や神奈川面会交流支援団体連合会ともつながるとのことだが、ネットワーク化や情報共有が目的になるのか。

(びじっと)

神奈川面会交流支援団体連合会は、その窓口に神奈川県民のための相談業務を展開していく計画である。その相談業務を通じて当団体のADRも紹介していければと考えている。

神奈川面会交流支援団体連合会の相談員は、今回の基金 21 事業として実施している養成プログラムを受けているので、実際には当団体の相談員が受ける形になっている。

(田中委員)

事業実績の進捗状況の部分で、拡大ADR会議を毎月開催されていると話があった。この会議の中では、どのようなADRの課題があげられ、どのような対策があがっているのか、例があれば教えてほしい。

(びじっと)

支援現場とADRの連携の中で、子どもと両親の全員に会っているのは支援スタッフである。そ

の支援現場とADRの調停員が連携するのは、守秘義務の関係でADR法上、非常に難しい問題がある。この会議は、弁護士が集まっているのだが、意見を聞いたり、様々な提案を受けながら法務省に対し、申請提案を行い、通るようになった。まずは、2月1日から認証が得られることが決まったので、これまでのADR拡大会議の毎月開催から年に2回に減らし、調停を実施していく中で課題や、法律的な問題があればその場で解決していくように変わっていく。

【オンラインを含めて不登校の子供と保護者の居場所を広げる事業】

NPO法人子どもと共に歩むフリースペースたんぽぽ（以下、「たんぽぽ」という。）によるプレゼンテーション（公開ヒアリング）を実施。

<質疑>

（山岡委員）

この事業は、オンラインの居場所を作ることが大きな特徴だと考えている。その中で、オンラインによる参加が、幹事会からの質問に対し、多くの子どもが集う状況にないと回答されていることから十分に広がっている状況ではないと思う。その原因はどこにあると考えているのか。

（たんぽぽ）

原因は、私たちの宣伝にもあると思うが、数として定着している子どもは、報告している人数だが、試しに入ってくる子や様々な形でゲームクラブに参加している子もいる。そのような子どもたちが定着していくことが大事とは思っている。

（山岡委員）

そのために対策や方策等をとっているか。

（たんぽぽ）

私たちにできることは子どもたちに寄り添うことであるので、私たちは最大限やっているつもりである。

具体的に、保護者の方への面談は、必ず1時間以上、複数回実施している。他にも、子どもと保護者の方とも個人的なLINEをつないで身近な形で相談や困った時に連絡ができる体制をとって継続的に関わることを大事にしている。

（山岡委員）

親の会に参加する親の方たちには、オンラインの居場所をどのように受け止められているのか。

（たんぽぽ）

保護者の方たちの気持ちは様々である。以前は、学校に行かせるために必死になっている方が多かったが、学校に行かないで別の場所を探そうとしている方も多い。そういうこともあり、ゲームについては、家で、一人でゲームをやっているのでも、遊び相手が必要かと思う。

実際には、ゲームの中でオンライン上でのトラブルも多い。他にも子どもがゲームをやりすぎたため、親がゲーム機を壊してしまったということもあった。そういったことが親の会でも話されて

いる。

ただ、子どもがゲームに依拠する。そのような環境にしかない子どもも多くいるので、それをまずは大事にしてあげたほうがよいという話をしている。

(山岡委員)

先ほどの質問の回答で、オンラインの交流の居場所に試しに入ってくる子どももいるが、なかなか定着に結びつかない中で、最大限にされているとのことだったが、貴団体の方々は、オンラインの居場所に可能性を感じているか。

(たんぼぼ)

ゲームが好きという子どもが多い。そこが一番大きい可能性だと思う。私自身は、ゲームはほとんどできないが、子どもたちが非常に楽しんでいる。私は、生の色んなものに触れてほしいと思っているが、子どもたちが楽しんで入ってくるということは、今はとても必要なことではないかと考えている。

(尹委員)

プレゼンの中では、人数が増えたという話があったが、こちらから見ると非常に物足りない点も多いと感じている。先ほどの回答の中で、ゲームクラブに参加して子どもが定着するための対策で子どもたちに寄り添うことを最大限行っているとあった。ただ、その対策をしても定着に結びついていないということは、そこにも何かしらの原因があると思う。その点について分析はしているか。

(たんぼぼ)

分析といった細かいことはしていないが、一番は時間が必要である。ゲームに入っても、自分は一言も誰とも話さないという子どももいる。私たちは、オンラインでも話をしながらゲームをすることがよいと思っていたが、話したくないという子どももゲームクラブに参加をしたいということもある。傷ついた子どもを復活させることは、1か月、2か月の単位ではできないことではないので、今の地道な活動を継続させていくしかないと思っている。

(尹委員)

あくまでもゲームをすることは、一つの手法であるはずだが、現状は、ゲームをすることが主になってしまっていると思う。傷ついた心の回復が必要であるのならば、そこをもっと掘り下げて、そこに行きつく方法を貴団体で考える必要があると思うが、その点をどのように考えているか教えてほしい。

(たんぼぼ)

それは、ゲームに限らず全体で考える必要があると思う。例えば、子どもたちを支える親の会や講演会等、様々な形で子どもたちに関わる周りの大人と一緒に手を取り合っていこうという方策はとっている。

ただ、家から出ることができず、インターネットの環境しかない子どももいるので、ゲームを楽しむことが必要な子どももおり、そこからしかつながることのできない子どももいるので、重要だ

と思っている。

(尹委員)

来年度の事業で、新たに父親の会や若者が集う場所に着手すると申請書に書かれているが、オンラインの居場所づくりが確実に実施できているとは感じられない中で、新しい事業に取り組むことは、どちらも成果が上がらないのではないかと危惧している。

本年度できなかったことや、本年度実施してきたことを進化させることに注力したほうがよいと思うが、どうか。

(たんぼぼ)

子どもを支えるためにはトータルな関係が必要だと考える。例えば、父の会は、父親が全く協力的ではなく、子どもを傷つける、学校に行かないことに対し、子どもを責めるといった母親たちの声から、まずは子どもたちを支える父親たちも考える場所があったほうがよいという考えから発足したもので、新たな事業ではなく、今の事業を支える大人の事業というつもりで計画している。

(田中委員)

現在は、オンラインのゲームを共通言語として、心を開かせるために活用をしていると思う。今は、オンライン上で自分と同じようなキャラクターを作成し、街に出かける、そこで他者と話すといったメタバースと呼ばれるオンラインの居場所があると思うが、それについて検討をする予定はあるか。

(たんぼぼ)

今度、動画を作る予定があるが、そこに本人たちが出ることは難しいと思うので、そこにキャラクターを作って出るということは検討している。

ただ、私たちは、そこはあくまでも入口で、子どもたちにはぜひ、本物の友達のつながりを体験してもらいたいので、そういうものを通じながらやっていきたいと思っている。

(委員による審議)

○ ボランティア活動補助金事業(継続)の提案事業に係る公開プレゼンテーション審査の結果を踏まえて審議を行い、事業を選考した。

※ 選考結果は後日団体に通知。

■ 閉会

(審査会長より閉会の宣言)

○ 令和4年度第5回神奈川県ボランティア活動推進基金審査会を閉会する。

(以上)